特集<3> 高校教育の現場から オンライン学習の未来像を見据えて

大阪府立桜塚高校

誰もが知る料理番組のメロディに乗せて、白衣姿の教員が化学実験を行う。音楽の効果なのか、実に楽しそうに見えるその動画はＹｏｕＴｕｂｅにアップされ、この先生は生徒たちからユーチューバーと呼ばれ親しまれているとか。大阪府立桜塚高校（豊中市）では、コロナ禍以前からＩＣＴ環境の充実を図っていたこともあって、比較的早くから遠隔授業などに取り組むことができたという。長期休校中をどう乗り切ったのか、同校で遠隔授業に中心的に係わってきた教員の皆さんを取材した。（編集部）

神チャンネル

化学の動画では、パワーポイントで作成した手順に淡々としたナレーションを入れつつ、器具や化学薬品を扱う手元だけを映している。生徒らは実験をしてから動画を見て復習し、書いたレポートをグーグルクラスルームで提出、採点を受けるという進め方だ。この動画を配信する井上幹太教諭は「繰り返し視聴することができるので見逃しがなく、学習効果はあります」と話す。作成の際の負担は小さくなく、４分の動画を作るのに２時間はかかるというが、すでに井上教諭は数年前からこうした動画を配信しており、そのスキルは高い。

実際に初期にアップした動画には「明日実験だから助かった」、「神チャンネルですね」など、生徒たちからとおぼしき書き込みが多数に上っている。内山勝則教頭によると「こうしたもともとスキルを持った先生方がいたことが、今回のコロナ禍では大きかったです」と言うが、「昨年までは足踏みをしていた教員もいたのも事実です」とも。

同校がＷｉ－Ｆｉ環境を整えたのは平成３０年度だった。ＩＣＴ授業の本格化に合わせて、教員側の利用頻度やスキルを上げる必要性を感じたからだ。それに先立ってグーグルクラスルームの利用をスタート。生徒のスマホ端末のアカウントを学校のものに切り替えさせて遠隔授業で使えるように準備し、「教員には教科ごとにどう使うかを工夫するよう促した」（内山教頭）という。

その結果、理科系の科目や探究の学習など、実験や調べ学習のある科目は利便性の高さが分かったが、「あえて遠隔授業をやる必要があるのか」とクエスチョンマークがつく科目もあって、教員間でも温度差があったという。

遠隔授業のマニュアル化

同校では電子黒板が配備された６年前から、通常の対面授業の中でも教科書に付属する映像資料を積極的に活用し、パワーポイントで資料を作成するなど少しずつ全体的なマインドも向上していた。そんな中、部活動ではなく教員の職掌として立ち上がったのが情報部だった。次世代型授業を円滑に実施するための措置だったが、溝口竜二情報部長によると「パソコンがうまく使える人が集まった、という感じでした」。

しかし３月以降、政府主導で全学校の臨時休校が始まると、多くの教員が生徒へのプリントなどの郵送に追われる一方で、情報部の存在が浮かび上がった。教務部長でもある本多隼人教諭も、「情報部の先生に教わりながら、同じ教科の教員同士などで助け合って使い方を学んでいきました」と当時を振り返る。

また井上教諭のように動画が得意な人は「こういうことができますよ」とやり方を共有し、オンデマンドでの授業の進め方と生徒の評価方法などを作り上げていった。例えばノート提出はできないので、学習内容を書いたノートをスマホで写真撮影させ、グーグルクラスルームに張り付けさせる、といった具合だ。情報部には現在８人が配属され、ノウハウの伝授や共有だけでなく、こうした様々な取り組みを集約し、仕事をマニュアル化する作業を進めているという。

さらに自然発生的に各教科の教員の間で工夫が始まっている。同じ動画をみんなで見たうえで自分なりのカスタマイズを加えたり、動画作成役、振り返りフォーム作成役、配信役など役割分担したりしながら指導内容の統一感も出せているという。「コロナの影響で、オンライン学習は浸透してきたといういい面は確かにありました」と溝口部長。一方で対面授業でしか得られないいい部分もあるといい、田尻肇校長は「今後、教育的効果が大きく、さらに教員の働き方改革や生徒の学習効率アップに繋がる、より良いオンライン・対面双方での授業の実現をめざしたい。ペーパーレスともリンクさせて、学校としてオンラインを推進していく」と方針を語る。

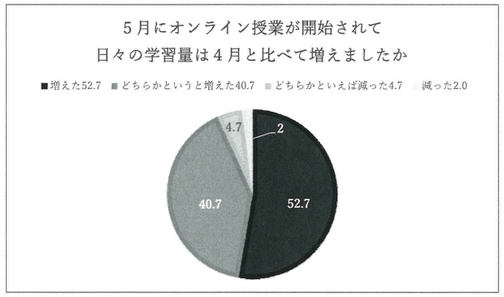
黒板があったなあ、と言う時代

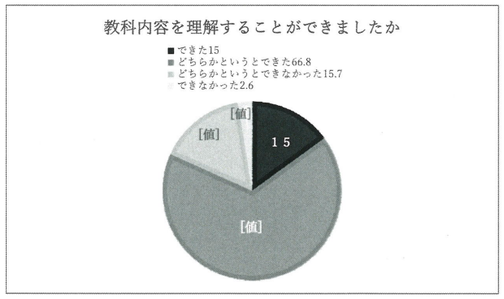
現在は、高校２年生と１年生にグーグル社が提供するアプリやリンク機能が簡単に使えるクロームブックが渡されていて、来年度には全員に行きわたるという。今年度の新入生には、端末を活用し、部活の各部が動画を撮影しての入部説明会も実施するなど、授業以外にも使っている。

今年６月に校内で実施したアンケート調査では、生徒の９３・４％が「学習量が増加した」「どちらかと言えば増加した」と答えている。また教科内容の理解についての設問では、８１・８％が「理解できた」「どちらかと言えばできた」と答えるなど、オンライン学習は概ね生徒にも好評なようだ。一方で、「頭に入らない」「細かい質問がし難い」など特有の悩みも。自由記述の回答では、「自分のペースでできた」「前の授業を確認しやすい」「手書きの時間ロスがなくなった」などオンラインのいい面を享受しつつ、動画や解説などが聞き取りやすかったり楽しかったりと、自分なりの学習を進めている姿が見えてきている。

内山教頭は、「クロームブックを学校でフル活用して、学校と生徒がいつでもつながっているというのが理想です」と語る。さらに教員一人一人による教材などのカスタマイズも重視、学力に応じて個別指導ができるというオンライン学習の利点を最大限に生かしながら、教員がファシリテーターとして生徒を引っ張っていく、そんな学校像を描いているとも。

「スマホには取扱説明書がありません。それでも多くの人が様々な機能を覚えていくのは、その便利さと効果を実感することにより活用の意欲が高まるからです。オンライン学習も同様で、効果を共有しながら組織的に無理なく進めていけば、苦手意識のある教員も少しずつスキルアップしていくことでしょう。将来、『昔は黒板というものがあってなあ』と教員が生徒に言う時代が来るのではないでしょうか」と田尻校長は次世代の教育現場を見据えている。





【学校紹介】

昭和１２年に府立第１４高等女学校として開校。２３年に共学となり桜塚高校と改称、同年定時制課程設置。専門コースとして、英語力の強化や国際的知識・教養を磨く「ＧＳＣ（グローバル・スタディ・コミュニケーションズコース）」とハイレベルな理数系授業を提供する「ＧＳＳ（グローバル・スタディ・サイエンスコース）」を設置するなど特色ある教育を実施。地元との地域連携にも力を入れるほか、東日本大震災被災地へのボランティアを通して岩手県立大槌高校とも交流を続けている。